

銭形平次捕物控

笑い茸

野村胡堂

青空文庫

一

伽羅大^き尽^{やらだいじん}磯屋^{いそや}貫^{かん}兵衛^{べえ}の涼^{すず}み船^{ふね}は、隅^{ぐも}田^た川^{がわ}を漕^こぎ上^あつて、白^{しら}鬚^{ひげ}の少^{せう}し上^{じやう}、川^{がわ}幅^{はく}の広^{ひろ}いところを^よ選^えつて、中^{ちゆう}流^{りゆう}に碇^{いかり}を^おろしました。わざと氣^き取^とつた小^{せう}型^{けい}の屋^や形^{がた}船^{ふね}の中^なは、念^{ねん}入^にりに酒^{しゆ}が廻^{まわ}つて、この時^{とき}もうハチ切^きれそ^うな騷^{さわ}ぎです。

「さア、皆^{みな}んな見^みてくれ、こいつは七^{しち}平^{へい}の一^{いち}世^{せい}一^{いつ}代^{だい}だ——おりん姐^{ねえ}さん、鳴^{なり}物^{もの}を頼^{たの}むぜ」

笑^{わら}い上^{じやう}戸^この七^{しち}平^{へい}は、尻^{しつぽ}を端^{はし}折^よると、手^て拭^ふをすつと冠^{かん}に四^し十^{じゅう}男^{なん}の恥^ちも外^{がい}聞^{もん}もなく踊^{おど}り狂^{くる}うのでした。

取巻の清五郎せいごろうは、芸者のお袖そでを相手に、引つきりなしに拳けんを打っておりまして。貫兵衛の義弟で一番若い菊次郎きくじろうは、それを面白いような苦々しいような、形容のしようのない顔をして眺めております。

伽羅大尽の貫兵衛は、薄菊石うすあばたの醜い顔ゆがを歪めて、腹の底から一座の空気を享樂している様子でした。三十五という、脂あぶらの乗り切った男盛りを、親譲りの金がありすぎて、呉服太物問屋の商売にも身が入らず、取巻末社を引きつれて、江戸中の盛り場を、この十年間飽きもせずうはちに押し廻っている典型的なお大尽です。

「卯八うはち、あの酒を持って来い」

大尽の貫兵衛が手を挙げると、

「へエ——」

爺やの卯八——その夜のお燗番かんばん——は、その頃はとびきり珍しかったギヤマンの徳利を捧ともげて鱸とちから現われました。

「さて皆の衆、聴いてくれ」

貫兵衛は徳利を爺やから受取つて、物々しく見得を切ります。

「やんややんや、お大尽のお言葉だ。皆んな静かにせい」

清五郎は真つ赤な顔を挙げて、七平の踊りとおりんの三味線を止めました。

「この中には、和オランダ蘭渡りの赤酒せきしゅがある。ほんの少しばかりだが、その味の良さというものは、本当にこれこそ天の美禄というものだろう。ほんの一杯ずつだが、皆んなにわけて進すすぜたい。さ

ア、年としがしら頭の七平から」

貫兵衛はそう言いながら、同じギヤマンの腰こしだかさかずき高盃を取つて、取巻の七平に差すのでした。

「有難いッ、伽羅大尽の果報にあやかつてそれでは頂戴仕るとしましようか、——おつと散ります、散ります」

野の幫だいこ間を稼業のようにしている巴ともえや屋七平は、血のような赤酒を注つがせて、少し光沢つやのよくなつた額ひたいを、ピタピタと叩くのです。

「次は清五郎」

これは主人と同年輩の三十五六ですが、雑ざつぱい俳はいも、小唄も、噓八百も、仕方しかたばなし噺も、音曲もいける天才的な道楽指南番で、七平に劣らず伽羅大尽に喰い下がっております。

「へエ——和蘭渡りの葡萄酒ぶどうの酒。話には聞いたが、呑むのは初め

て——それでは頂戴いたします、へエ——」

美しいお蔭つたにお酌しやくをさせて、ビードロの盃になみなみと注いだ
赤酒、唇くちびるまで持つて行つて、フト下へ置きました。

「どうした、清五郎」

少し不機嫌な声で、貫兵衛はとがめます。

「いえ、少し気になることがございます」

「なんだ」

「あれを——気が付きませんか、橋場はしばのあたりでしょう。闇の中
に尾を引いて、人魂ひとたまが飛びましたよ」

「あれッ」

女三人は思わず悲鳴をあげました。

「おどかしてはいけない、たぶん四つ手駕籠かごの提灯ちようちんかなんか

だろう」

と貫兵衛。

「そんな事かもわかりません、——ああ結構なお酒でございました、——もう一杯頂戴いたしましょうか」

清五郎は綺麗に呑み干した盃を、お蔭の前に突き付けるのです。

「それはいけない、酒にも人数にも限りがある。その次は菊次郎だ」

「そうおっしゃらずにもう一杯、——頬つぺたが落ちそうですよ」

「いや、重ねてはいけない、それ」

貫兵衛が目配せすると、お薦は清五郎の手から盃をさらって、菊次郎のところへ持つて行きました。貫兵衛の義理の弟で三十前後、これは苦み走ったなかなか良い男です。

菊次郎もどうやら一杯呑みました。義兄が秘蔵の赤酒は、こんな時でもなければ口に入りそうもありません。

続いて芸者のおりんとお袖、お薦は呑む真似だけ。大方空っぽになった徳利は、盃を添えて鱸のお燗番のところに返されました。

二

「あ、お前は」

お爛番の卯八は飛付きました。が、その徳利を奪い取る前に、船頭の三吉さんきちは徳利の口を自分の口に当てて、少しばかり残っていた赤酒を、雫しずくも残さず呑み干してしまったのです。

「いいってことよ、今日は大役があるんだ。酒でも呑まなきゃ、仕事が出来るものか」

「でも、その酒を呑んじやいけないことがあつたんだ。しょうがねえなア」

「ケチケチ言いなさんなよ、酒の一本や二本、なんでえ」

船頭の三吉は、お爛番の卯八の文句に取合う様子ありません。それからの騒ぎが、どんなに悪魔的なものであつたか、たった一人素面しらふだった、若い芸者のお蔭だけがよく知っております。

一番先に狂態を演じたのは、江崎屋えざきやの清五郎でした。

「ウ、ハツハツハツ、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ、こりや可笑おかしい、ハツハツハツ、ハツ」

腹を抱えて笑い出すと、その洞うつろな笑いが、水を渡り闇を縫うつて、ケラケラケラと川面一パイに拡がって行きました。

それをきっかけのように、しばらくの間坐ったまま、顔の筋肉をムズムズ動かしていた巴屋の七平は、物に憑つかれたように起き上がって、筋も節もなく踊り始めたのです。

続いて菊次郎——日頃賢そうに取澄ましているのが、膳を二三枚蹴飛ばすと、湧き上がるような怪奇な手振りで、ヒョロリ、ヒョロリと人の間を泳ぎ廻るのです。

年増芸者のおりんは、何やらわめき散らして、狭い船の中——杯盤の間を滅茶滅茶に転げ廻りました。日頃気取つてばかりいる中年増のお袖も、訳のわからぬ事を歌い続けながら、あられもない双肌脱ぎもろはだぬになつて、尻尾に火の付いた獣のように、船の中を飛び廻ります。

その中でも一番猛烈を極めたのは、船頭の三吉でした。口から泡を吹いて、酔眼をビードロのように据えたまま、野猪のじしのように、艫みよしから舳へ、舳から艫へと、乱れ騒ぐ人間を掻きわけて飛び廻ります。

鎮まり返つた隅田川の夜気を乱して、船の中には、一瞬気違ひじみた旋風が捲き起つたのです。洞ろな笑いと、訳の解らぬ絶叫

と、滅茶滅茶にもつれ合う中を、六人の男女が狂態の限りを尽すのでした。

一番若くて、一番綺麗なお蔦は、たいふう颪風の眼のように移動する動乱の渦を避けて、お爛番の卯八の懷に飛込んだり、伽羅大尽の貫兵衛の背後にうしろ隠れたりしました。船はちやうど隅田川の真ん中に停ったまま、ちよつとも動く様子はありません。この動乱を避ける道は、夜の水より外にはないので、水心のないお蔦はさすがにそこへ飛込むほどの勇氣もなかったものでしょう。

「旦那、どうしたんでしょう、私は、私は怖い」

日頃は醜いがま蝦蟇かなんかのようについていた貫兵衛も、今の場合では、たった一人の救いの神でした。ほとんど素面しらふで、艫から

この狂態をジツと見詰めている貫兵衛の冷たい顔には不気味なうちにも、妙に自信らしいものがあつたのです。

「怖がることはないよ、あいつらは騒ぐことが好きなんだ、——あんなにゲラゲラ笑いながら、滅茶滅茶に踊り狂いながら、地獄の底まで道中するんだ」

貫兵衛の醜い顔は、悪魔的な冷笑に歪んで、六人の狂態を指した手は、激情に顫ふるえます。

「助けてエー、旦那様」

お蔭は思わずがりついた袂たもとを離しました。冷静を装う貫兵衛の顔には、踊り狂う六人の顔よりも物凄いものがあつたのです。その騒ぎの中から、船頭の三吉はヒヨロヒヨロと艫に戻りまし

た。

「退^どいてくれ、——俺は、大変なことを忘れていた」

片手業にお爛番の卯八をかき退けると、予^{かね}て用意したらしい、木槌^{こづち}を取って、船底の栓^{せん}を横なぐりに叩くのです。

「あッ」

お爛番の卯八は後ろから、その身体を羽交^{はが}締^いめにしました。ここで船底の栓などを抜かれたら、船の中の九人は、ひとたまりもなく溺れ死ぬことでしよう。

「止^よしてくれ、——邪魔しやがると、手前^{てめえ}のガン首から先に抜くぞ」

いきり立つ三吉。

「頼むからそいつは止してくれ」

「何を言やがる」

振りもぎった三吉、もういちど槌は勢いよく振りあげられます。その争いは一瞬にして片付きました。船頭の三吉が予て仕掛けをしてあつたらしく、船底の栓が他愛もなく抜けるのと、卯八の必死の力が、荒れ狂う三吉を舷ふなばたから川の中へ押し転がすのと、ほとんど一緒だったのです。

ドツと奔騰ほんとうする水。

「あッ」

卯八は今抜き捨てた栓を捜しましたが、咄嗟とつさの間に三吉が川の中へ抛ほうり込んだものか、それは見当りません。自分の身体を持つ

て行つて、穴からほんちゆう奔注する水を防ぎましたが、そんな事では、
 なんの役にも立たないことが、すぐ解つてしまいました。

船の中の狂乱は、一瞬ごとにその旋回度を増して、やまみず山水に空
 廻りするみずぐるま水車のような勢い。

「あッ、そうだ」

卯八は料理のために用意した出刃庖丁を取出すと、いかりづな碇綱を
 ブツリと切りました。あとは、ろ艀に寄つて、馴れないながら一と
 押し、二た押し。

水浸しになつた涼み船は、それでも白鬚の方へ、少しずつ少し
 ずつは動いて行きます。

時々ドツとあがる笑い声、それも次第に納まつて、乱舞も大方

な
 屈いだ頃、船は向^{むこう}島^{しま}の土手の下、三間ほどのところへズブズ
 ブと沈んでしまいました。

三

魂の抜けたように、呆^{ぼう}然^{ぜん}としている貫兵衛を促し、か弱いな
 がら、一番気の確かなお蔭を手伝わせて、卯八一人の大働きで、
 水船から引上げた人間は四人、船頭の三吉と、野^の幫^{だい}間^この巴屋七平
 は、それつきり行^{ゆく}方^え知れずになつてしまいました。

近所の船頭をかり集め、松^{たい}明^{まつ}を振り照して川筋を捜しました
 が、その晩はとうとう解らず、翌^{あく}る日の朝になつて、船頭三吉と、

野幫間七平の死骸は、百本杭ぐいから浅ましい姿で引上げられました。ところで、不思議なことに、呑む、打つ、買うの三道楽に身を持崩して、借金だらけな船頭三吉の死骸からは、腹巻の奥深く秘めた百両の小判が現われ、野幫間七平の死骸には、背後から突き刺した凄まじい傷が見付かったのです。

「こんなわけだ、親分、行つてみて下さい。前代未聞の騒ぎじゃありませんか」

ガラツ八の八五郎は、得意の早耳で、これだけの事を聞込んで来たのでした。

「そいつは御免蒙ごめんこうむろう、向島じや縄張ちげ違えだ」

銭形平次は相変らず引込み思案です。

「縄張の事を言や、三輪みのわの万七親分だつて縄張違いでしよう」

「それがどうした」

「いきなり川を渡つて、現場をさんざん荒らし抜いた上、柳橋に渡つて、お蔭を挙げて行きましたぜ」

「それが見込み違えだというのか」

と平次。

「お蔭は芸者稼業こそしているが、親孝行で心掛けの良い娘だ、人を殺すか、殺さねえか、親分」

「大層腹を立ててるようだが、誰かに頼まれて来たんじゃないやあるまいな、八」

「へエ——」

「誰だか知らないが、門口かどぐちで赤いものがチラチラするようだ、

ここへ通すがいい、——お静」

「はい」

女房のお静は心得て門口へ行つた様子ですが、何やら押問答の末、モジモジする娘を一人、手を取らぬばかりに伴つれて来ました。

「お前さんは？」

平次も少し面喰めんくりました。まだほんの十七八、身みな扮は貧し気な木綿物ですが、この界かい限わいでも、あまり見かけた事のない良い娘こです。

「ヘッヘッ、——お蔭の妹ですよ、親分」

ガラツ八は不意気に五本指で小鬢こびんなどを搔かいております。

「早くそう言やいいのに、——なんと言いなさるんだ」

「お絹^{きぬ}さんてんだ、親分、——あつしの叔母さんの知合いで」

ガラツハはまだモジモジしております。

「お絹さんと言うのかい、——一体どうしたというんだ。みんな話してみるがいい。俺の力で及ぶことなら、なんとかして上げよう」

錢形平次が、こう言うのは、全くよくよくのことでした。それだけ、このお絹という小娘は、好感の持てる娘だったのです。

油っ気のない髪、白^{おしろい}粉も紅も知らぬ皮膚、山のはいった赤い

帯、木綿物の地味な単衣^{ひとえ}、なに一つ取柄^{とりえ}のないようですが、そ

のつくろわぬ身扮につつんだ、健康そうな肉体と、内気な純情と

は、どんな人にも、訴えずにはおかなかつたでしょう。

「姉を助けて下さい、親分さん」

「一体、どうしたのだ」

「姉は——たいこもち 幫間の七平をうら怨んでいました。あの人がお袖さん

に頼まれて、余計な事を言い触らしたばかりに、菊次郎さんと切れてしまったんです」

「それで？」

「それで、七平を殺したのは、姉さんに違いない——つて、三輪の親分が言います」

「フーム」

「それから、ゆうべ 昨夜船の中で、みんな気違いみたいになつたのに、

姉だけ一人、平気でいたのが怪しいんですって」

「それだけの事なら、お前の姉さんを下手人にするわけにはゆくまい。外ほかになんか手掛りがあるだろう」

三輪の万七の老ろうかい獺さが、それだけの証拠でお薦を縛らせるはずありません。

「姉ちゃんは怪けが我をしていたんです」

「……？」

「手首を切って、ひどく血が出ていたんですって」

「そんな事もあるだろう、——よしよし、俺が行って覗いてやろう。親孝行で評判の良いお薦が、人など殺せる道理はない、——
八、一緒に行ってみるか」

「へエ——」

親分を引つ張り出したのは、自分の手柄だけではなかったにしても、フェミニストの八五郎は、すっかり有頂天になって、親分の草履など揃えております。

四

「おや、銭形の」

向島で沈んだ船を見て、百本杭へ死骸を見に行つた平次は、現場でハタと三輪の万七に逢つてしまいました。

「万七兄^{あにき}哥、もう下手人の目星が付いたようだな」

「今度は間違いがねえつもりだ。女の怨みは恐ろしいな、錢形の、
——磯屋の貫兵衛は江戸一番の醜男ぶおとこだが、あの弟分の菊次郎は、
また苦み走ったとんだ良い男さ。お蔭はあの男に捨てられたのを
七平のせいだと思ひ込んでゐるんだ」

自分の手柄に脂下やにさがる万七に案内されて、ともかくも、引取手
もなく、筵むしろを掛けたままにしてある二人の死骸を見ました。

船頭の三吉は、稼業しょうばい柄にもなく、水に落ちて死んだとい
うだけのことですが、野幫間のだいこの七平の死骸には、背中から突ついた傷
が一つ、水に晒さらされて、凄まじい口を開いております。

「ヒ首あいくちや剃刀かみそりじゃねえ」

「出刃庖丁だよ、水船の中から拾って番所に預けてある」

万七は先に立ちました。

番所へ行つてみると、船頭三吉の腹巻から百両の小判と血^ち脂^{あぶら}の浮いた出刃庖丁と、それから、嚴重に縄を打ったままのお蔭が留め置かれております。

水船から這^はい上がつて、半身ぐしよ濡れのまま縛られたのでしよう、腰から下は生^{なま}湿^{しめ}りのまま、折目も縫目も崩れて、筵の上にしよんぼり坐つたお蔭は、妙に平次の感傷をそそります。

妹のお絹によく似た細^{ほそ}面^{おもて}、化粧崩れを直す由もあります
が、生れながらの美しさは、どんな汚な作りをしても、蔽^{おほ}う由も
なかったのでしょう。うな垂れた緑の眉から、柔かい頬のあたり
が霞んで、言いようもない痛々しい姿です。

「お前は左利きかい」

平次の最初の問は唐突とうとつでした。

「いえ」

わずかに顔を挙げるお蔭。

「傷は右手首のようだが、——どうしてそんな怪我をしたんだ」

「自分の持った出刃庖丁で切ったのさ、解り切ったことじゃないか」

万七は苦々しく遮さへぎります。

「右手に持った出刃庖丁で、右手首を切るはずはない」

平次のそう言う言葉に力を得たものか、

「お爛番の卯八さんが、碇綱を切って投げた庖丁が当たったんです」

お蔭は顔を挙げてはつきり言うのでした。

「本人はあんな事を言うがね」

と万七。

「だが、三輪の兄哥、若い女の手で、七平を殺した上、船頭の三吉まで水の中へは投り込め^{ほう}ないよ」

「なんの中毒か知らないが、船の中では皆んな半狂乱だったそうだよ。目の昏^{くら}んだ人間なら、女一人の手でも、二人や三人の始末出来ないことはあるまい」

万七は頑としてお蔭に疑いを釘付け^{くぎづ}にするのでした。

「お蔭——お前はいまだ変な事になっているよ、——みんな申上げてしまっちゃどうだ、隠し立てをして、万一の事があると、母

親や妹が、とんだ嘆きをみることになるぜ」

「親分さん、私は、私はなんにも知りません」

平次の言葉の意味が解ると、お蔭はたださめざめと泣くのです。
「船の中で正気だったのは、磯屋とお爛番の外には、お前一人だ
ったというじゃないか。お前はなにか知ってるに違いあるまい」

「……………」

「お前の妹のお絹が、先刻俺の家へ来たよ。母親の嘆きを見てい
られないから、なんとか、姉を助けてくれ——と言って」

「親分さん」

お蔭は縛られたまま、ガバと泣き伏しました。

「言うがいい、お前はなにか知っているに違いない」

「……………」

お蔭は黙って頭を振りました。

「ね、銭形の、この通りだ」

万七は我が意を得たる顔です。

五

「親分さん方、——磯屋の爺やが、申上げたいことがあるそうですよ」

下っ引が一人、うさんに鼻を持って来ました。

「卯八か、呼出すつもりだった。ちようどいい、ここへつれて来

い」

「へエ——」

間もなく、下つ引に案内されて、恐る恐る膝ひざこぞう小僧を揃えたのは、昨夜ゆうべのお燭番——磯屋の庭掃き卯八でした。五十六七——ちよつと見は六十以上にも見えますが、長い間戸外生活と労働で鍛えて、鉄のようにがんじょう巖乗なところがあります。

「なんだ、卯八」

万七は事件が厄介らしくなる予感で、少しばかり苦い顔を見せました。

「お蔭さんが縛られたと聞いて、びっくりして飛んで参りました。お蔭さんは、始終私が旦那の側に居りました。人を殺すなんて、

とんでもない」

「それじゃ、誰が七平や三吉を殺したんだ」

万七は乗出します。

「私ですよ、親分さん、——この卯八ですよ」

「何？」

「三吉を川へ抛り込んだのは、この私に違ひほうございません」

「なんだと？」

「船に仕掛けを拵こしらえて、中流で沈めにかかったのは、あの三吉で

ございますよ。私は船底の栓を抜かせまいと思つて一生懸命組打をしました。が、なんといつても年のせいで、三吉を川へ抛り込んだ時は、もう栓が抜かれて、水が滝のように入っていました。

仕方がないから、碇綱を切つて、滅茶滅茶に岸へ漕ぎ寄せました」
 卯八の言葉は予想外でした。が、これだけ筋が立っていると、
 もはや疑う余地ありません。

「三吉はなんだってそんな事をしたんだ」

平次もこの恐ろしい企ての意味は読みかねました。

「船の中の人間を皆殺しにするつもりだったかも知りません。
 碇綱で川の真ん中に止めた船が沈めば、あんなに酔つていちや、
 助かるのが不思議です」

「皆んな気違いじみた騒ぎをしていた——とお薦も言うが、なん
 か変なものでも吞ませたんじゃないか」

「……………」

「土手に這い上がると、ケロリとしていたが、船の中に居る時のことは、なんにも知らないと言うぞ」

万七は畳みかけました。

「……………」

卯八は頑固に口をつぐみます。

「それじゃ、七平を殺したのは誰だ」と平次。

「それはわかりません」

「お前じやないと言うのか」

「七平は舳^{みよし}に居りました。私やお蔭^{とも}さんは艫^{とも}に居りました」

「出刃はお前が抛って、お蔭の手に当ったそうじゃないか。その

出刃で七平が殺されているんだぜ」

平次はその時の情景を想像している様子です。

「……………」

「七平の側には誰と誰が居たんだ」
そば

「おりんさんと、清五郎さんと、菊次郎さんと——」

「主人の貫兵衛は？」

「旦那様と、お袖さんは、私と七平さんの間に居りましたよ」

「フーム」

今度は平次が黙り込んでしまいました。

六

「八、昨夜船ゆうべに乗っていた人間を、片っ端から調べ上げてくれ」

「へエ——」

「男も、女も、どんなつまらない事でも聞き漏らしちゃならねえ。七平と懇意なのや、七平に怨みや恩のあるのは、とりわけ大事だよ」

「そんな事ならわけはねえ」

「急ぐんだよ、八」

「へエ」

「それから磯屋の貫兵衛も、身しんしょう上から女出入りまで、根こそぎ調べて来い、こいつは一番大事だ」

「心得た」

「一人で手に負えなかったら、下っ引を二三人駆り出せ、明日の朝までだよ、八」

平次の言葉を半分聞いて、八五郎は飛出しました。それから半日。

「親分」

八五郎はもう帰って来たのです。

「どうした、八」

「いろいろの事が判りましたよ」

「話してみな」

「お薦が七平の細工で、菊次郎と割かれたことは——」

「それはもう判っている」

「菊次郎はとんだ野郎で、金と女を取込むことにかけては大変な名人ですよ」

「……………」

「お薦と手を切つて、近頃はお袖に夢中になっていますよ」

「フーム」

「兄貴の磯屋の身代を、どれだけくすねたか解りやしません。近頃磯屋の身上が歪んで、伽羅大尽の貫兵衛は首も廻らないのに、菊次郎だけは、大ホクホクだ」

「磯屋がそんなに悪いのか」

「この盆は越せまいという話ですよ。何しろ十年越しの駄々羅遊だだら

びだ。どんなに身上があつたつてたまつたものじゃない。それに、
おとうと義弟の菊次郎を始め、巴屋七平、江崎屋清五郎などは、滅茶滅
おだ茶に煽てて費つかわせて、そのかすりを取ることはかり考えているん
 だ」

「清五郎と七平の暮し向きはどうだ」

「野の幫だい間を稼業のようにしているくせに近頃は大変な景気だ。こ
 とに清五郎なんか、地所を買ったり、家を建てたり、おりんの身
 請けをするという話もありますよ」

「よしよし、それでだいぶ判つたようだ。ところで、八、横山町
 の町役人に会つて、明日の辰刻いつつ（午前八時）前、磯屋の主人貫兵
 衛が、御手当になるはずだ、万事抜かりのないように仕度をして

おけ——とこう言っておいてくれ」

「それは、本当ですか、親分」

「本当とも、笹野ささのの旦那には、あとでそう言っておく、——こいつは大変な捕物で、抜かっちゃならねえ」

「あんまり早く町役人に言っておくと、磯屋の耳に入りますよ」
「それでいいんだよ」

「へエ——」

「おツと待った、八」

「……………」

「今晚、少し仕事がある。横山町の自身番へ潜もぐり込んで、俺の行くのを待ってくれ」

「へエ——」

八五郎は何が何やら解らずに飛んで行きます。

それから二た刻ばかり、江戸の街々もすつかり寝鎮ねしずまった頃、

平次は横山町の自身番を覗きました。

「八」

「あッ、親分」

「静かについて来い」

二人はそれつきり黙りこくつて、城郭のような磯屋の裏口へ忍び寄りました。

「何をやらかすんで、親分」

「ちよいと、泥棒の真似をするんだ」

「へエ——」

「どんな事が始まって、驚くなよ、八」

「……………」

平次の調子の物々しさに、八五郎もツイ胴ぶるいが出るのでした。

「この塀へ飛付けるだろう」

「大丈夫ですか、親分は」

「大丈夫だとも」

二人は裏口の側そばの天水桶を踏台にして、あまり苦勞もせず、塀を乗り越えました。

「どうするんで、親分」

「シッ」

「驚いたなア」

「驚くのはこれからだよ」

磯屋の裏をグルリと一と廻り、平次は家の中へ忍び込めそうな場所を探す様子でしたが、伽羅大尽と言われた構えだけに、さすがに忍び込む場所ありません。

「親分、あれは？」

「シッ」

平次は八五郎を突き飛ばすように、あわてて物蔭に身を潜^{ひそ}めました。裏口が静かに開いて、真っ黒なものが、そろりと外へ出たのです。

「……………」

二人は呼吸いきを殺して見詰めました。

真つ黒な人間は、しばらく外の様子を見ている様子でしたが、誰も見とがめる者がないと判ると、引つ返して家の中から手てしよく燭を持って来ました。

磯屋の主人、伽羅大臣貫兵衛です。

貫兵衛は平次と八五郎には気が付かなかったものか、その前を通り抜けて、物置の方へ足音を忍ばせます。

「来い」

平次は八五郎を小手招きながら、静かにその後をつけました。やがて物置から、プーンとキナ臭い匂い、パチパチと物のはぜ

る音。

「八、大變だ。あの火を消せ」

「おうッ」

二人が一団になって飛込むと、磯屋貫兵衛は、手燭の火を、物置の中のガラクタに移している最中だったのです。

「野郎ッ」

遮しやにむに二無二飛込むガラツ八。

「あッ」

燃え草の火の中に、貫兵衛と組んだまま転がり込みました。咄と嗟つさの間に平次は、物置の側にある井戸に飛付くと、幸いそこにあつた用心水を一杯、燃え上がったばかりの焰ほのおの上へ遠慮会釈もな

く、ドツと浴びせたのです。

「わッ、ブルブル」

火は消えました。が、ガラツ八と貫兵衛は、取っ組んだままズブ濡れになって、物置の口へ転がり出ます。

「なんという馬鹿なことをするんだ。御府内の火付けは、火焙りひあぶだぞ」

平次はそれを闇の中に迎えて叱咤しったします。

「相すみません」

相手の素姓も判りませんが、貫兵衛は威圧されて、思わず大地に崩れました。

「幸い誰も気が付かない様子だ、——酒へ毒を入れたり、物置へ

火をつけたり、一体これはどうした事だ」

「……………」

「俺は神田の平次だ、話してみちやどうだ」

平次の声は威圧から哀憐あいれんに変つておりました。

「銭形の親分——良い方に見付かりました。みんな申上げます。
この私が、今晚死ななければならぬわけ——」

七

物置の前から奥の一と間に案内されて、平次とガラツ八は、磯屋貫兵衛の不思議な懺悔ざんげばなし話に耳を傾けました。

「聴いて下さい、親分、この世の中に、私ほど幸せに生れて、私ほど不幸せになった者があるでしょうか」

磯屋貫兵衛の話はこうでした。

貫兵衛が父の跡を継いだのは十年前、ちようど二十五の歳、金持のお坊っちゃんに育つて、阿諛あゆと諂てんねい佞ねいに取巻かれ、人を見下してばかりきた貫兵衛は、自分の世帯になつて、世の中に正面から打ぶつかった時、初めて、自分の才能、容貌、魅力——等に対する、恐ろしい幻滅を感じさせられたのです。

それまで、自分ほど賢い者は、江戸中にもあるまいと思つたのが、我わがまま儘な坊っちゃんの言い募る言葉に屈従する人達の姿であり、自分ほど立派な男はあるまいと信じさせたのは、おべっかを忠

義と心得た、卑怯ひきような人達のお世辞を、鏡と没交渉に信じていたにすぎないことを、つくづくと思い当らせられる時が来たのでした。

貫兵衛は、恐ろしい失望と自棄やけに、氣違いじみた心持になりましたが、間もなく、何万両という大身代が自分の自由になったことと、その何万両を散じさえすれば、お坊っちゃん時代の昔の夢を、苦もなく再現することの出来ることに、氣が付いたのです。

あらゆるお世辞、——齒の浮くような阿諛を、法外な金で買つて、貫兵衛は溜飲りゆういんを下げました。色街の女達も、百人が九十人まで、小判をバラ撒まきさえすれば、助六のように自分を大事にしてくれます。

行くところ、煙管きせるの雨は降りました。家へ帰ると、女達の手紙を、使い屋が何十本となく持つて来てくれました。やがて、金の力の宏大なのに陶醉して、貫兵衛はもう一度、それが自分に備わった才能、徳望のように思い込んでしまったのです。

それから十年の間、貫兵衛はあらゆる狂態をし尽しました。女房を迎える暇もないような忙せわしい遊蕩ゆうとう——そんな出鱈目でたらめな遊びの揚句は、世間並みな最後の幕へ押し流されて来たのです。

手っ取り早く言えば、磯屋にはもう一両の金も無くなっていたのです。家も、屋敷も、商品も、二重にも三重にも抵当に入つて、この盆には、素っ裸で抛り出されるか、首でも縊くるより外に、貫兵衛の行く場所はなかったのです。

「そうなる、女どもは皆んな私から離れてしまいました。お薦も、おりんも、お袖も、——それから私を十年越し喰い物にしていた遊び仲間も、蔭へ廻って私の悪口を言うようになりました。

おとうと

何千両となく取込んだ義弟の菊次郎も、巴屋の七平も、江崎屋の清五郎も、私の顔を見て、近頃はもう昔のようにお世辞笑いをしなくなつたばかりでなく、わざと私に聞えるように、私の悪口をさえ言うようになったのです」

貫兵衛の話の馬鹿馬鹿しさ、ガラツ八の八五郎さえ、我慢がな
り兼ねてときどき膝を叩きますが、錢形平次は世にも神妙に構え
て、

「それから」

静かに次を促します。

「私は一期いちごの思い出に皆んなを馬鹿にしてやろうと思いました。昔金に飽かして手に入れた、笑い茸わらだけの粉を和蘭渡りオランダの赤酒せきしゅに入れて、皆んなに一杯ずつ吞ませ、あらん限りの馬鹿な顔をさせてみるつもりだったのです」

話は次第にその晩の筋になつて来ます。

「涼み船を出して、首尾よく笑い茸の酒を吞ませ、皆んなの、あらゆる馬鹿な姿を眺めました。それがせめてもの——翌あくる日は死んで行く私の腹癒はらいせだったのです。その晩帰ると、奉公人に皆んな暇を出し、この家に火をつけて、私は首でも縊るつもりでした。

——それが、船を沈められたり、七平が殺されたり、あんな思い

も寄らぬ騒ぎになってしまったのです。私の死ぬのは、そのお蔭で一晩遅れました——もつとも」

「……………」

「もつとも、卯八だけは私の心持をよく知っていました。あればかりは、私におべつかも使わず、お世辞らしい事も言いませんが、こんな落目になつても、一生懸命、私を庇^{かば}ってくれました。」

——笑い茸の企みなども、最初はたつて止めましたが、命に別条のないことだからと説きふせられて、私に一世一代の溜飲を下げさせたのです」

「船を沈めさせたのは誰の指図だ」

平次はそれを知りたかつたのです。

「それは知りません。——私は自分の命さえ捨てるつもりでした。今さら嘘も偽りもありません。船頭の三吉に、船を沈めることを言い付けたのだけは、この私じゃない」

「すると？」

「第一、私にはもう、百両という小判がありませんよ」

貫兵衛はそう言つて淋しく笑うのです。三吉の死体の腹巻にあった金の事でしよう。

八

「親分、驚いたね」

ガラツ八は、黙々として横山町から帰る平次に声を掛けました。
磯屋貫兵衛を町役人に預けて、さてこれからどうしようもなく、
家路を辿^{たど}つていたのです。

「俺も驚いたよ。七平を殺したのは、お蔭や貫兵衛でない事は確かだ」

「三吉に言い付けて、船を沈めさせた奴じやありませんか」

「えらいツ、八、そこへなんだって気が付かなかったんだ。あの晩、赤酒を呑む振りをして呑まなかった奴と、泳ぎのうまい奴を調べて来い、——こんどは間違いないぞ」

「そんな事ならわけはありませんや」

「どこへ行って聞くつもりだ」

「船宿を軒並叩き起して——」

「それもいいが、卯八とお蔦に聞くのが早いぜ」

「心得た」

ガラツ八は闇の中に飛びます。翌る朝ガラツ八が、その報告を持って来たのは、まだ薄暗いうちでした。

「親分、驚いたのなんの」

「どうした、八」

「あの中で泳げないのは、貫兵衛と爺やの卯八だけですよ」

「何？」

「死んだ七平なんぞと来た日にや、河童かっぱみたいなもので」

「菊次郎と清五郎は？」

「二人ともよく泳ぐそうですよ、——もつとも女どもは皆んな徳利だ、少しでも泳げそうなのは、橋場で育ったお袖ぐらいのものです」

「すると——面白いことになるぜ。七平は船が沈んでも死にそうもないから刺されたというわけだろう」

「そこですよ、親分」

ガラツハは大きな声を出します。

「ところで、赤酒を呑まないのは、誰と誰だ」

「そいつが大笑い、親分」

ガラツハはクスリクスリと笑います。

「何が可笑おかしい」

「あの伽羅大尽の貧乏大尽がどこまでお目出たいか解らない」

「どうしたんだ」

「赤酒の中に、なんか仕掛けがあると知って、たった一人も呑んだ奴がないと聞いたらどうします」

「本当か、それは、八？」

この情報には、さすがの平次も驚きました。

「どうかしたら、殺された七平くらいは呑んだかも知れないが、菊次郎も清五郎も、おりんも、お袖も呑んじやいません。皆んな川に捨てたり、手拭にしめしたりしたそうで——これは最初から素面しらふだったお蔭と卯八が見届けていますが。もつとも三吉は確かに呑んだそうで」

「なるほどな」

「笑い草なんて、そんなものを吞ませて、万一間違いがあつてはと、人の良い卯八がそつと菊次郎に耳打をしたんです」

「そいつは大笑いだ、——吞まない毒酒を吞んだ振りをして、六人揃つて氣違い踊りと馬鹿笑いをするとはふざけたものだな、伽羅大尽の馬鹿納めには、なるほどそいつは良い狂言だ」

「ところで下手人は誰でしょう、親分」

「解っているじゃないか」

「へエ？」

「皆んなだよ」

平次は八五郎と一緒に、まず磯屋の近所に住んでいる菊次郎を

襲いました。猛烈に暴れるのを縛って、続いて江崎屋の清五郎を、それから——年増芸者のおりんとお袖とを、四人数珠じゆずつな繋ぎにして、その朝のうちに送ってしまったのです。

*

「さア判らねえ、下手人は四人ですかい、親分」

「その通りだよ。菊次郎が頭領かしらになって、この十年の間に、磯屋の身代を滅茶滅茶にし、その半分ぐらゐは自分達が取込んでいるんだ」

「そいつは世間でも知っていますよ」

「いよいよ磯屋が身代限りということになると、お白洲しらすへ出るから、自分達の悪事がみんな知れる、——涼み船で笑い草を吞ませるという話を卯八から聴いて、菊次郎と清五郎は、その裏をかく相談をしたんだ。船頭の三吉に百両の大金をやつて、川の真ん中で船を沈めさせ、貫兵衛とお薦と卯八を、溺れさせ、自分達だけ助かるつもりだったのが、その場になつて七平が不承知を言い出して、仲間割れが出来てちよつと困つたところへ、船頭の三吉は本当に毒酒を呑んで、卯八のような年寄りに川へ抛り込まれた」

「へエ——」

「卯八の抛つた出刃庖丁を拾つたのは、一番近いところにいたお袖だ。お袖の手から菊次郎が受取り、これを清五郎に渡した。清

五郎がそいつで舳みよしに後ろ向きになっている七平を突き、川の中へ落したんだろう。ただ川の中へ突き落したぐらいじゃ、泳ぎのうまい七平は死なない——七平に寝返りを打たれちや菊次郎も清五郎も首が危ない」

「なアる——」

「そんな事をしているうちに船は岸に着いた。人立ちがして来たから、その上の細工は出来なかったのだろう」

そう説明されてみると疑う余地ありません。四人——七平を加えて五人でやった細工なら、なるほど手際よく運びもするでしょうが、最後の際きわに、七平の裏切りと卯八の忠義で、悪者どもの企みが喰い違ってしまったのです。

「悪い奴らじゃありませんか、親分」

「人間の屑くずだよ、——俺の立てた筋はまず間違いはあるまいと思う。このお調べは面白いぜ、八」

「ヘエ——」

「気の毒なのは磯屋の貫兵衛だ、——が、自業自得というものさ、——それよりも可哀想なのはお蔭だ」

平次はつくづくそう言うのでした。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（十）金色の処女」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年2月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第九卷」中央公論社

1939（昭和14）年8月5日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1939（昭和14）年8月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2019年3月29日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

笑い茸

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>